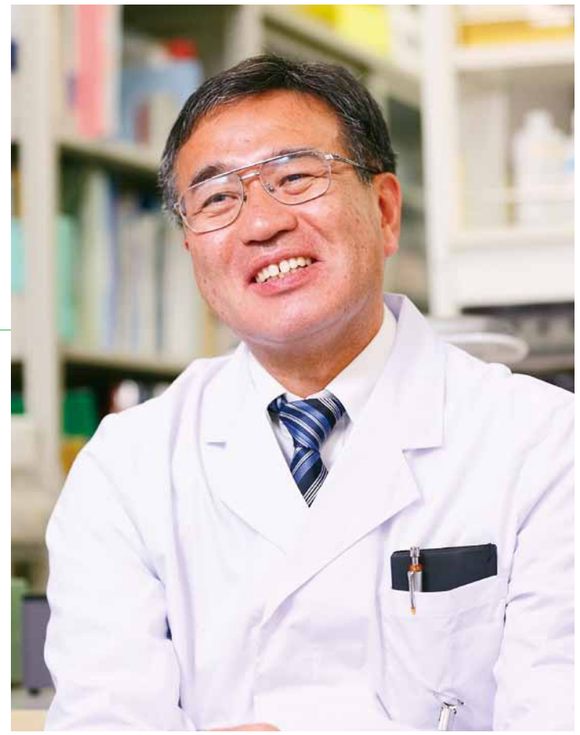
生命のはじまりを見守り、心を磨く医療で地域を担う。

**臨床を原点に、地域の産婦人科医療の中核をめざす。
福井大学附属病院の産婦人科は今、そんな気風にあふれている。
昨年４月に初めて「連合医会」が発足し、勤務医と開業医の垣根を超えた連携を実現、
一方で子宮体がんや子宮筋腫を識別するPET診断法の共同開発はじめ、
不妊治療や総合周産期センターの面でも地域が注目する実績を挙げている。**

福井大学附属病院
産婦人科

医療最前線からのリポート

CLOSE UP NOW!



PROFILE

吉田 好雄　よしだ・よしお

教授

昭和63年3月　福井医科大学医学部医学科卒業
昭和63年6月　福井医科大学医学部附属病院
　　産科婦人科医員（研修医）
平成元年 2月　福井医科大学医学部産科婦人科学助手
平成2年 7月　公立高島総合病院産婦人科医師
平成6年12月　福井医科大学医学部産科婦人科学助手
平成9年10月　イスラエルワイツマン研究所留学（2年3ヶ月）
平成13年5月　福井医科大学医学部附属病院産科婦人科講師
平成18年9月　福井大学医学部産科婦人科助教授（准教授）
平成24年6月　福井大学医学部産科婦人科教授
○専門領域　婦人科腫瘍

「連合医会」の発足が変革の一歩

「大学の医局には優秀な医師はいますし、若手医師も少数ですが毎年、着実に増えてきています。ただ10年後を考えると、必ずしもいい状況とは言えません。大学病院は県下の産婦人科医療の中核であり、県全体の産婦人科医療をけん引、主導していく立場。少しでも改善できることをやっていきたいと考えています」

今年6月、福井大学医学部附属病院産婦人科の新教授に就任した吉田好雄氏は現状をそう打ち明ける。人口20万人余りを数える福井市内には現在、病床数400床以上の大きな拠点病院が4つ集中、加えて産婦人科と小児科に特化した民間病院もあることから、こと産婦人科医療に限って言えば患者は質の高い医療が受けられる環境にある。しかし、これまで病院間の系列に左右され医師同士の交流、連携が必ずしもスムーズではなかった。こうした医師同士の垣根を超えた連携を促進するために、昨年4月「連合医会」が発足した。

「先代の教授が尽力されて道筋ができたのですが、開業医を主体にした医会と、勤務医が中心の学会という二つの組織を一本化したのが連合医会です。県内の産婦人科医療を支える先生方が集まって連携、交流していくのが趣旨で、県下の産婦人科医療の活動方針や課題などをしっかり議論し、垣根を超えて情報交換や交流を促進していく組織です。わたしたちの専門分野にも好結果をもたらし、臨床や研究の大きな後押しになっています」

吉田教授は、連合医会のメリットとして人事交流の活発化と医師同士の距離間が深まる、統一した学術的な研修会、勉強会が開催できる、県下全体で産婦人科医療の年間活動ができることなどをあげており、地域の拠点病院や開業医からも大きな期待が寄せられている。

連合医会の発足、活動と相まって、福井大学医学部附属病院産婦人科では臨床や研究面でも注目すべき成果をあげている。現在、産婦人科は腫瘍部門、生殖医療部門、周産期医療部門の三つの柱がある。各部門の臨床・研究分野の最新トピックスなどを紹介しよう。

■腫瘍部門

世界初の子宮筋腫、肉腫の診断法を開発

吉田教授の専門でもある腫瘍部門での最新のトピックスは、PET画像診断による子宮筋腫や子宮肉腫の診断法の開発だ。これは福井大学高エネルギー医学センターとの共同研究により実現したもので、がん検診などで行うPET（ポジトロン断層法）を使って、女性ホルモンの受容体を分子イメージングし、筋腫と肉腫を高い精度で識別する診断法。

PET検査は、一般的にFDG（フルオロデオキシグルコース）というブドウ糖に似た薬剤にフッ素（F-18）を付加したPET薬剤を用いて、がん細胞で活発になるブドウ糖代謝活性を検出してがんの動き、状態を検査する。しかし子宮肉腫ではブドウ糖代謝が活発になるものの、良性筋腫代謝活動は様々で、中には高い代謝活性を示すものもある。

吉田教授らの研究グループでは、子宮肉腫には女性ホルモンの作用部位であるエストロゲン受容体が少ないことから、通常のFDGではなく、FES（フルオロエストラジオール）という女性ホルモンにフッ素を付加したPET薬剤を用いた、FES－PET検査を追加で実施。それにより、子宮筋腫と肉腫の識別を90％以上の確率で識別できた。吉田教授はこれらの研究成果を、2007年に「ギネコロジックオンコロジー」という雑誌に世界で初めて症例発表、婦人科がんで女性ホルモンの受容体の存在を確認することを証明した。

「子宮体がんや子宮筋腫、肉腫はこれからますます増えることが予想されています。それに伴い筋腫や肉腫の識別、がんの場合は進行期を予測することは、どういう治療をしたらいいかを見極める判断材料になります。たとえば、最近は子宮筋腫を切らずに治す治療法が多数出現しており、治療前の良性、悪性の判断は以前にもまして重要視されています。筋腫なのに肉腫の可能性があると判断されたり、逆に早期の肉腫なのに筋腫の保存的治療がなされたりすることがないように、手術前のPET検査で実施されることをおすすめしたいと思っています」

吉田教授らの研究成果は国際的にも認められつつあり、検査を希望する人は県内外から希望者が相次いでいる現状だという。

■生殖医療部門

生命の始まりという感動体験

生殖部門は、不妊治療と不育症治療に大別される。福井大学の産婦人科教室では、初代教授の富永敏朗氏が「子宮内への受精卵の着床」、二代教授の小辻文和氏が「卵巣での卵胞の発育と排卵」研究でそれぞれわが国第一人者の実績をもつ。現教室では、折坂誠講師が研究を引き継ぎ、地方大学ではありながら日本の生殖医療領域をリードしている。

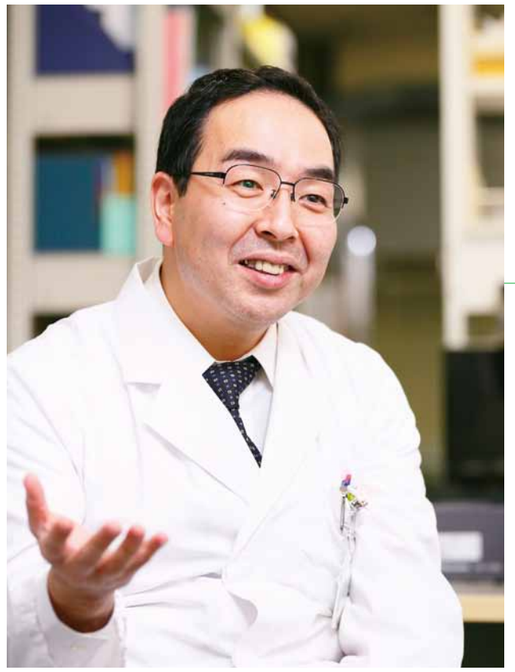
不妊症においては、可能な限り自然に近い妊娠をテーマに、臨床でいかに卵子を育てられるか、動物実験などを通して研究を重ねながら、顕微授精など最先端の技術にも取り組んでいる。一方、妊娠したものの流産を繰り返す不育症に対しては、子宮の血流を改善する治療法を開発。これにより、元気な赤ちゃ

PROFILE

折坂　誠　おりさか・まこと

副科長・講師

平成 5年 3月　福井医科大学医学部医学科卒業
平成 5年 5月　福井医科大学医学部附属病院産科婦人科医員（研修医）
平成 6年 4月　弥栄町国民健康保険病院産婦人科医師
平成 6年 7月　市立舞鶴市民病院産婦人科医師
平成 7年 7月　産婦人科荒木病院医師
平成 8年 9月　弥栄町国民健康保険病院産婦人科医師
平成11年 6月　福井医科大学医学部附属病院産科婦人科医員
平成11年10月　福井医科大学医学部産科婦人科学助手
平成15年10月　文部科学省在外研究員としてカナダ・オタワ大学に留学
平成17年 9月　カナダより帰国
平成19年 4月　福井大学医学部産科婦人科学助教
平成20年 7月　福井大学医学部産科婦人科講師
○専門領域　生殖・周産期



PROFILE

黒川 哲司 くろかわ・てつじ

医局長

平成 5年3月　福井医科大学医学部医学科卒業
平成 5年5月　福井医科大学医学部附属病院
　　産科婦人科医員（研修医）
平成 7年7月　福井県済生会病院産婦人科医師
平成10年9月　公立高島総合病院産婦人科医師
平成13年7月　福井医科大学医学部産科婦人科学助手
平成18年4月　米国MDアンダーソン癌センターに留学
平成20年3月　米国より帰国
平成20年7月　福井大学医学部附属病院産科婦人科講師
○専門領域　婦人科腫瘍

んの出産に数多く成功している。

不妊症や不育症の妊娠出産は、ハイリスクが伴うため周産期部門との緊密な連携をとりながら日々の診療を行っている。折坂誠講師が、産婦人科医の魅力についてアピールする。

「精子と卵子が一緒になる現場を診ることは、生命のスタートが見れるということ。不妊症や不育症の研究は医学生に対する教育的観点という側面もあり、自分の目で生命の誕生という感動を診て、研究して、出産にも立ち会う。産婦人科医はとかく長時間勤務などでつらい仕事ばかりがクローズアップされますが、新たな生命のはじまりを見守る、とても感動的な医療だということをもっと広く知ってもらいたいと思います」

■周産期部門
高度な医療と正常分娩を体験する

平成24年9月に福井大学附属病院に総合周産期医療センターが新設された。胎児異常の早期発見やハイリスク妊娠の母体管理、新生児の救命救急などを担う施設で、MFICU（母体管理）が3床、NICU（新生児救命救急）が6床、NICUの後方ベッドであるGCUが6床整備された。

福井大学医学部附属病院は、これまで、福井県周産期ネットワークにおいて県立病院を支える役割を担ってきた。その役割を基本的に踏襲しつつも、これを機に、大学病院としての存在感を強く発揮していく方針だ。周産期が専門の西島浩二医師が、大学病院が総合周産期母子医療センターを持つ意義を強調する。

「大学病院の各診療科には県内でもトップレベルの診療技術をもった医師が揃っています。ハイリスク妊娠や様々な合併症をもった妊婦に対応するためには、診療科の垣根を越えた協力が必要です。大学病院の機能をフルに生かし、高度な管理が必要とされる妊娠、出産に対応していきたいと考えています。

加えて、これまでは、病床不足により、地域の先生方からの母体搬送の受け入れ要請を、心ならずもお断りすることがありました。MFICUやNICUが出来て、これらの妊婦さんを引き受けられるようになったこと、すなわち、地域の先生方の私たちへの期待を裏切らずに済むようになったことを、何よりもうれしく思っています。連合医会が発足し、今後ますます、大学病院と県内各地の医療機関との連携が強まって行くでしょう。福井県周産期ネットワークが、本当の意味で完成に向かうと思います。」

周産期部門では、ハイリスク妊娠だけではなく、県内外の産科医が少ない地域に医師を派遣し、正常妊娠分娩をサポートしている。大学の医局がなければ、福井県にも多くの出産難民が生まれていたはずである。現在の体制こそ福井大学の誇りであり、利便性と高度医療を同時に提供するユニークな医療連携として、全国的にも注目されている。

■医局の特徴
医療人の心と感性を磨く

福井県はもとより北陸全体でも産婦人科医が不足している中で、毎年2人という医局員を確保している福井大学医学部附属病院産婦人科。そのなかで吉田教授は、医局員の基本理念として「臨床が原点」を掲げる。それは、患者から臨床を学び、研究につなげ、それを後進にも伝えることを示している。医局長を務める黒川哲司医師がその意義を代弁する。

「一人ひとりが高度で専門的な医療だけでなく、正常分娩も均等に体験することでどこにいても良い医療を提供できることを基本にしています。都市部の大きな病院に入局することだけが医師の成長を約束するものではありません。たとえ僻地でもそこで勉強し、身につけた知識、体験を持って再び大学に戻ることも大きな成長につながります。要は、自分が一番吸収できる時に良い医療を体験し、学ぶことが結局は、良い医療の提供につながる。そういう医療を体験した人が福井県の医療を支えていってくれることを願っています」

吉田教授は「良い産婦人科医を育てるには、まず医療人としての心をいかに磨き上げるかが重要」だと口にする。そのためには「生命のスタートが大事。それを診ていかないと心が養われていかない」と、黒川医局長は強調する。生命のスタートを見守り、人間としての心と感性を磨く。それが福井大学医学部附属病院の婦人科医に必要な資質なのだ。■

PROFILE

西島 浩二 にしじま・こうじ

助教・病棟医長

平成 6年 3月　福井医科大学医学部医学科卒業
平成 6年 5月　福井医科大学医学部附属病院
　　産科婦人科医員（研修医）
平成 8年 4月　公立小浜病院産科婦人科医師
平成10年 9月　福井県済生会病院産婦人科医師
平成13年 9月　福井医科大学産科婦人科学助手
平成14年 3月　倉敷中央病院小児科NICU
平成14年 9月　福井医科大学産科婦人科学助手
平成19年 4月　福井大学医学部産科婦人科学助教
○専門領域　周産期